
深 谷 市

北 坂 遺 跡 III

(仮称) 寄居 P A スマートインターチェンジ発掘調査業務委託に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 6

東日本高速道路株式会社 関東支社
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

寄居パーキングエリアスマートインターチェンジ（仮称）は、東日本高速道路株式会社と深谷市、寄居町、美里町の一市二町により、地域経済の活性化と雇用強化、交通利便性の向上と交通分散による渋滞緩和、災害に強い地域づくりの支援を目的として整備が進められています。

さて、深谷市と寄居町、美里町の境に位置する本地域には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回発掘調査を行った北坂遺跡もその一つです。最初の発掘調査は、昭和51年に関越自動車道上り線寄居パーキングエリアの建設に先がけて実施されており、縄文時代と平安時代の集落跡が発見されています。

今回の発掘調査は、寄居パーキングエリアスマートインターチェンジの整備に伴う事前調査であり、東日本高速道路株式会社の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、今から約2万6千年前の旧石器が発見されました。この時期は、浅間山が大規模な噴火を繰り返し、利根川の流路が変わるなど、自然環境が大きく変動しました。そのため、人々の生活の拠点は太田台地や武蔵野台地の県南部に移動したと考えられます。今回発見された旧石器は、環境が激変する最中にも、人々が力強く生活していたことの証であることを窺わせます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、東日本高速道路株式会社関東支社、深谷市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年11月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩 野 谷 孝 志

例 言

1. 本書は深谷市に所在する北坂遺跡（第3次）の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の記号と代表番地、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

北坂遺跡第3次（北坂3）

深谷市本郷字北坂 3069 番地 1 他

平成 27 年 9 月 2 日付け教生文第 2-29 号

3. 発掘調査は、（仮称）寄居 P A スマートインターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。北坂遺跡第3次の調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、東日本高速道路株式会社関東支社の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。発掘調査事業（平成 27 年度）

「（仮称）寄居 P A スマートインターチェンジ埋蔵文化財発掘調査業務委託」

整理・報告書作成事業（平成 28 年度）

「（仮称）寄居 P A スマートインターチェンジ埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は I-3 に示した組織により実施した。

北坂遺跡第3次調査は、平成 27 年 9 月 1 日から平成 27 年 10 月 31 日まで実施し、西井幸雄・山本 靖・砂生智江が担当した。

整理・報告書作成事業は、平成 28 年 8 月 1 日から平成 28 年 9 月 30 日まで実施し、西井幸雄が担当した。

平成 28 年 11 月 22 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 426 集として刊行した。

6. 北坂遺跡第3次の発掘調査における基準点測量及び遺構・地形測量は、株式会社ヤマト測建に委託した。

空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。

自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は西井・山本・砂生が行い、出土遺物の写真撮影は西井が行った。

8. 出土品の整理・図版作成は西井が行った。

9. 本書の執筆は、I-1 は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、他は西井が行った。

10. 本書の編集は西井が行った。

11. 本書にかかる諸資料は平成 28 年 12 月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査や本書作成にあたり、下記の機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

深谷市教育委員会 寄居町教育委員会

凡 例

1. 本書におけるX・Yの座標は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 36°00′ 00″、東経 139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

H-10 グリッド北西杭の座標は、X = 19470.000 m、Y = -57390.000 m、（北緯 36°10′ 25.6275″、東経 139°11′ 45.3033″）である。

2. グリッドの設定は 10 × 10 m の基本グリッドを設定した。表記は、北西隅を基点として、北から南方向にアルファベット（A、B、C…）、西から東方向に数字（1、2、3…）を付した。
3. 本書における本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。
S K…土壌 P…ピット
4. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。例外は図中に縮尺とスケールを示した。
全体図 1:500 遺構図 1:60
旧石器分布図 1:60
土器拓本 1:3 土器実測図 1:3
石器実測図 4:5 1:3
5. 遺構の規模は、長軸・短軸で表示した。
6. 観察表中の器種名・石材名は、以下のとおりである。

石器器種

Kn：ナイフ形石器 Sc：掻・削器 F：剥片

C：砕片

石器石材

Ob：黒曜石 Ch：チャート B.Sh：黒色頁岩

G.An：ガラス質黒色安山岩

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）で示した。
8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
・口径・器高・底径の単位はcmとし、（ ）の数値は推定値、[] の数値は現存値を示す。
・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて示した。
・色調は、新版標準土色帳（1995 年後期版）に従った。
・残存率は、図示した器形の部分に対する割合を%で示した。
・備考には、生産窯・年代等を記した。
9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の 1/50,000 地形図（寄居・高崎）、深谷市と寄居町の都市計画図を編集して使用した。
10. 本書に掲載した遺構番号は、原則として調査時のものを採用した。

目次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(4) 第2文化層	16
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 縄文時代	19
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 土壌	19
(1) 発掘調査	2	(2) グリッド出土遺物	19
(2) 整理・報告書の作成	2	3. 中・近世	19
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	(1) 土壌	19
II 遺跡の立地と環境	3	(2) ビット	21
1. 地理的環境	3	(3) グリッド出土遺物	21
2. 歴史的環境	5	V 自然科学分析	22
III 遺跡の概要	6	1. 重鉾物組成、火山ガラス比分析、屈折率測定、テフラの検出同定	22
IV 遺構と遺物	9	VI 調査のまとめ	29
1. 旧石器時代	9	1. 調査の成果	29
(1) 基本土層	10	2. 石器群の編年	29
(2) 旧石器時代の文化層	11		
(3) 第1文化層	11		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3	第12図 第2文化層石器出土状況	17
第2図 周辺の遺跡	4	第13図 第2文化層出土石器	17
第3図 北坂遺跡の範囲と周辺の地形	7	第14図 第5号土壌・出土遺物	19
第4図 調査区全体図	8	第15図 グリッド出土遺物	19
第5図 旧石器全体図	9	第16図 土壌・ビット	20
第6図 基本土層	10	第17図 グリッド出土遺物	21
第7図 第1号石器集中	12	第18図 土層断面柱状図	24
第8図 第1号石器集中出土石器(1)	13	第19図 重鉾物組成及び火山ガラス比	24
第9図 第1号石器集中出土石器(2)	14	第20図 火山ガラス及び斜方輝石の屈折率	26
第10図 第2号石器集中	15	第21図 北坂遺跡第2・3次旧石器分布図	30
第11図 第2号石器集中出土石器	16	第22図 石器編年図	31

表目次

第1表	旧石器器種・石材組成表	11	第4表	グリッド出土遺物観察表	21
第2表	旧石器観察表	18・19	第5表	重鉱物・火山ガラス比分析結果	26
第3表	ピット計測一覧表	21	第6表	テフラ分析結果	26

写真図版目次

図版1	1 北坂遺跡空中写真	5 第1文化層遺物出土状況（西から）
	2 遠景（南から）	6 第1文化層遺物出土状況と土層断面
図版2	1 近景（西から）	7 第1号石器集中遺物出土状況（1）
	2 遠景（北西から）	8 第1号石器集中遺物出土状況（2）
	3 遠景（北から）	図版4
	4 調査区全景（西から）	1 第1号石器集中遺物出土状況（3）
	5 調査区全景（東から）	2 第2号石器集中遺物出土状況
	6 調査区全景（北から）	3 第2文化層調査区（南東から）
	7 基本土層	4 第2文化層遺物出土状況（1）
	8 第Ⅷ層平面状況	5 第2文化層遺物出土状況（2）
図版3	1 G-13 グリッド断面	6 第5号土壌
	2 G-9 グリッド断面	7 第1・2・4・6～9号土壌
	3 H-13 グリッド断面	8 第3号土壌
	4 第1文化層調査区（西から）	図版5
		1 出土遺物
		図版6
		1 重鉱物・火山ガラス・砂分の状況

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

関越自動車道寄居 PA スマートインターチェンジ事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成 26 年 10 月 6 日付け東高関支所管第 581 号で、東日本高速道路株式会社関東支社所沢管理事務所長より埼玉県教育委員会教育長あて、埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについての照会があった。

これに対し、生涯学習文化財課では試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した。この結果をもとに、平成 27 年 3 月 11 日付け教生文第 2675-2 号及び、平成 27 年 5 月 26 日付け教生文第 406-1 号で取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が存在します。

名称	種別	時代	所在地
北坂遺跡 (No.63-091)	集落跡	旧石器・ 奈良・ 平安	深谷市大字 北坂地内

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が存在します。包蔵地内で工事着手する場合は、工事に先立ち、文化財保護法第 94 条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「記録保存が必要な区域」については、工事計

画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

北坂遺跡の調査にあたっては、深谷市が工事を実施する範囲が含まれることから、東日本高速道路株式会社関東支社所沢管理事務所、深谷市、深谷市教育委員会、埼玉県教育委員会、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の五者により、調査の実施方法等についての協定を締結した。

また、協議の結果、東日本高速道路株式会社関東支社所沢管理事務所が工事を実施する範囲（第 3 次調査）は、平成 27 年 9 月 1 日から 10 月 31 日までの期間で発掘調査を実施することになった。

その後、文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘通知が東日本高速道路株式会社関東支社所沢管理事務所長から提出された。これに対し、記録保存のための発掘調査を実施するよう、埼玉県教育委員会教育長から平成 27 年 4 月 30 日付け教生文第 4-18 号で通知を行った。

また、同法第 92 条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。発掘調査届に対しての埼玉県教育委員会教育長からの通知番号は以下の通りである。

平成 27 年 9 月 2 日付け教生文第 2-29 号
(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

北坂遺跡第3次調査は、平成27年9月1日から平成27年10月31日まで発掘調査を実施した。調査面積は2,611.80㎡である。

発掘調査事務所は、北坂遺跡第2次調査から継続して使用した。

平成27年9月初旬から重機による表土掘削を実施し、遺構の確認作業に入った。9月上旬から遺構の精査を行い、9月下旬に旧石器時代以外の調査を終了した。その後、旧石器時代の調査を実施し、10月中旬に高所作業車による調査区の写真撮影、10月下旬に空中写真撮影を行った。10月下旬に埋戻しを行い、全ての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成作業は、平成28年8月1日から、平成28年9月30日まで実施した。

8月上旬から出土遺物の水洗・注記を行い、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終

了した遺物は8月中旬から順次抽出を行い、実測作業を開始した。実測が終了した遺物については、実測図のトレースを開始し、版下図面の作成に着手した。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して8月上旬から行った。発掘現場でデジタル測量した遺構平面図を修正し、断面図と合わせた。次に、画像ソフトを用いて断面図のトレース・土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

9月から原稿執筆を開始し、遺物写真撮影・遺構写真図版の作成などを実施した。9月中旬に印刷割付を作成し、9月末に印刷業者に入稿した。9月下旬から実測図・写真データ・遺物等の仮収納を行った。

報告書の印刷は3回の校正を行い、11月末に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成27年度（発掘調査）

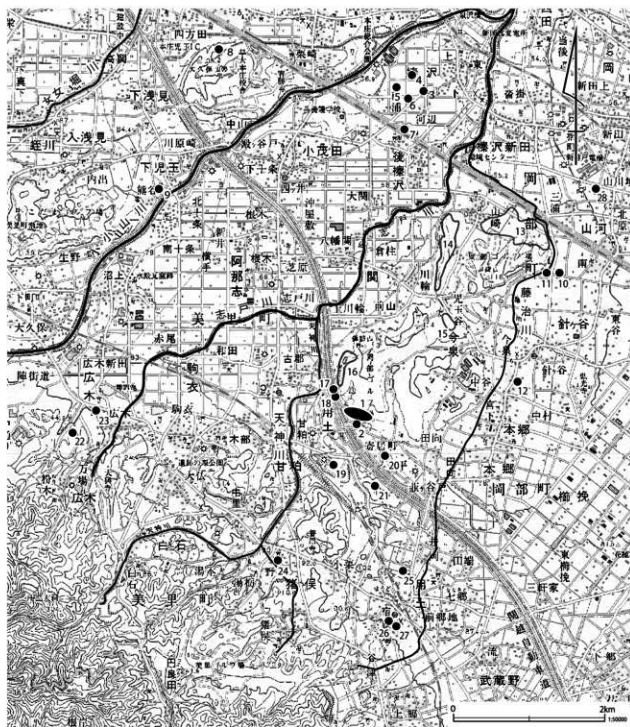
理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之
総 務 課 長	安 田 孝 行

調査部	
調 査 部 長	金 子 直 行
調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
主幹兼調査第二課長	田 中 広 明
主 幹	西 井 幸 雄
主 査	山 本 靖
主 事	砂 生 智 江

平成28年度（報告書作成）

理 事 長	塩 野 谷 孝 志
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	曾 川 浩 二

調査部	
調 査 部 長	金 子 直 行
調 査 部 副 部 長	細 田 勝
主幹兼整理第二課長	山 本 靖
主 幹	西 井 幸 雄



- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1 北沢道跡 | 2 中平道跡 | 3 西宮道跡 | 4 沖田I道跡 | 5 沖田II道跡 |
| 6 沖田田道跡 | 7 東光寺裏道跡 | 8 浅見山I道跡 | 9 宮ヶ谷戸道跡 | 10 西谷道跡 |
| 11 水久保道跡 | 12 伊勢方道跡 | 13 千光寺古墳群 | 14 猪山古墳群 | 15 西山古墳群 |
| 16 調部山古墳群 | 17 安光寺古墳群 | 18 清水谷道跡 | 19 甘粕山道跡群 | 20 用土・平道跡 |
| 21 中山道跡 | 22 広木上宿道跡 | 23 麻蔵神社前道跡 | 24 中野道跡 | 25 堀米道跡 |
| 26 用土高城道跡 | 27 用土北沢道跡 | 28 西龍ヶ谷道跡 | | |

第2図 周辺の道跡

2. 歴史的環境

旧石器時代

後期旧石器時代前半期の遺跡は、北坂遺跡第2次調査と寄居町末野遺跡がある。北坂遺跡第2次調査では、頁岩製のナイフ形石器と黒曜石製の台形様石器がまとまって出土しているが、この時期に特徴的な局部磨製石斧等は出土していない。一方、末野遺跡では局部磨製石斧と打製石斧が出土した。

後期旧石器時代後半期の遺跡は、本市市浅見山Ⅰ遺跡（8）と寄居町赤浜牛無具利遺跡がある。浅見山Ⅰ遺跡は、旧石器時代調査トレンチから、黒曜石製のナイフ形石器2点と剥片類が約50点検出された。また、グリッドや他時期の覆土中から出土した石器を含めると117点になる。石器の形態から、複数の時期の石器群と考えられる。トレンチから出土した石器は、二側縁加工のナイフ形石器である。赤浜牛無具利遺跡は石器集中1箇所が検出され、黒曜石製のナイフ形石器・搔器がまとまって出土している。両遺跡とも砂川期の良好な資料である。

縄文時代

草創期は、深谷市西谷遺跡（10）と水久保遺跡（11）が著明である。両遺跡は近接し、多縄文系土器群が出土している。

早期は、美里町甘粕山遺跡群（19）の東山遺跡から撚糸文系土器群終末段階の土器と石器がまとまって出土している。

前期は、深谷市西宮遺跡（3）から花積下層式～関山式期の集落跡、深谷市東光寺裏遺跡（7）では諸磯式期の集落跡が調査されている。

中期は、美里町広木上宿遺跡（22）と寄居町堀米遺跡（25）で、加曾利E式期の集落跡が調査されている。

弥生時代

寄居町用土・平遺跡（20）は、中期の竪穴住居跡10軒が検出され、多数の土器と磨製角石

斧等が出土している。埼玉県内において、弥生時代研究の基準資料となっている。

甘粕山遺跡群の如来堂C遺跡では、縄文時代終末から弥生時代前期の土器がまとまって出土している。

古墳時代

北坂遺跡の谷を挟んだ北側には、深谷市安光寺古墳群（17）が存在する。低地から見上げる、諏訪山・山崎山の縁辺部には、諏訪山古墳群（16）、西山古墳群（15）、千光寺古墳群（13）、猪山古墳群（14）が営まれている。

寄居町用土北沢遺跡（27）と用土高城遺跡（26）では、周溝から円筒埴輪が出土している。

古墳時代の集落跡は、寄居町中野遺跡（24）と堀米遺跡がある。

奈良・平安時代

北坂遺跡の谷を挟んだ北側には、深谷市清水谷遺跡（18）が存在する。古墳時代末期から平安時代の集落跡が見つかっている。

甘粕山遺跡群の東山遺跡は、平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡の近くから出土した瓦塔・瓦堂は、重要文化財となっている。

寄居町中山遺跡（21）は、2回の発掘調査によって、奈良時代から平安時代の集落跡と製鉄炉が検出された。製鉄炉の発見された隣接地点の第3次調査では排滓泥が検出され、多くの鉄滓が出土している。甘粕山遺跡群の如来堂D遺跡では、平安時代の炭焼窯がまとまって検出されている。

中世

広木上宿遺跡から、漆箱とその中に入っていた金・銀・金銅・銅・鉄製の小型宝塔と小型未開敷蓮華が見つかっている。宝塔の時期の推定は難しいが、広木上宿遺跡に伝承される寺院跡との関連から、中世に位置付けられる。

Ⅲ 遺跡の概要

北坂遺跡は、JR 八高線用土駅の北西約 2.2 km、深谷市と寄居町、美里町との境に所在する。遺跡は、松久丘陵が開析作用によって残丘状になった諏訪山の南側に立地している。諏訪山は開析によって多くの谷が入り、複雑な地形を呈している。また、関越自動車道と上り線寄居パーキングエリアの建設に伴う掘削工事によって、現況では地形の把握が難しくなっている。

北坂遺跡は、今までに 2 回の発掘調査が実施されている。

第 1 次調査は、昭和 51 年に関越自動車道上り線寄居パーキングエリアの建設に先立つ調査である。検出された主な遺構は、縄文時代前期の土壇 1 基と南側斜面地に形成された遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡 14 軒・掘立柱建物跡 9 棟・土壇・溝跡等である。遺物は、縄文時代包含層から早期の土器片と石器が多数検出された。平安時代は須恵器・土師器の他に円面硯・焼印・鉤・鈴等が出土している。平安時代の集落跡は、調査区の南東部から検出されている。諏訪山の南部が西側に張り出した部分の、南側斜面地に形成されている。竪穴住居跡は標高 82～84 m にまとまり、掘立柱建物跡は竪穴住居跡よりも標高の高い部分から見つかっている。

第 2 次調査は、寄居スマートインターチェンジの建設工事に伴い、平成 27 年 4 月から 7 月に深谷市分として実施した。検出された主な遺構は、後期旧石器時代前半期の石器集中 23 箇所と平安時代の竪穴住居跡 1 軒・溝跡 2 条である。遺物は、旧石器時代のナイフ形石器、台形椀石器、搔・削器、剥片類、石核と平安時代の須恵器環・土師器甕等が出土している。後期旧石器時代前半期の石器集中は、調査区南東部の標高 81 m 付近の平坦部から石器集中 23 箇所が検出された。石器集中は 40×40 m の範囲に密集しており、石器が 399

点出土した。主な石器は、頁岩製のナイフ形石器、黒曜石製の台形椀石器と搔・削器である。また、頁岩と珪質頁岩の接合資料は、石核に約 20 点の剥片が接合したもので、当該期の剥片剥離技術を復元するための貴重な資料である。

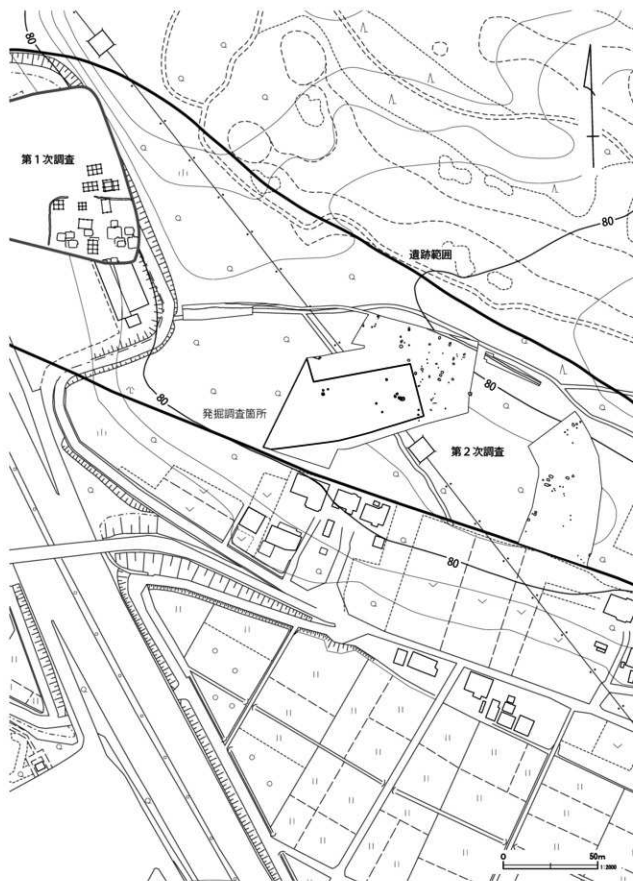
今回の第 3 次調査は、第 2 次調査区に囲まれた範囲にあたり、調査面積は 2611.80 m² である。第 2 次調査の調査状況から、平安時代の遺構・遺物の分布は薄く、旧石器時代の遺構・遺物が高い可能性で見つかることが想定された。旧石器時代の調査は、10 m グリッドの北西コーナーに 2 m 四方のトレンチを設定し、遺物の有無を確認した。石器の検出されたトレンチは周辺を拡張し、遺物の広がりを調査した。

調査の結果、後期旧石器時代の石器群が、層位の異なる 2 つの文化層から検出された。

北坂遺跡の基本土層は、第 III 層がソフトローム層、第 IV～VI 層がハードローム層、第 VII 層が暗色帯に大別できる。ハードローム層は色調や含まれるデフラによって細別される。第 2 次調査で第 IV 層を 1 枚の層と捉えていたが、今回の調査では第 IV a 層と第 IV b 層に細分できた。また、火山灰の分析によって、第 IV a 層から浅間板鼻褐色軽石 (As-YP)、第 V・VI 層から浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP) が確認できた。その結果、石器群の出土層位と火山灰の対比が可能になり、石器群の年代を絞り込むことが可能となった。

第 1 文化層は、調査区南側の H・I-8・9 グリッドから、石器集中 2 箇所が検出された。出土層位は、基本土層の第 V 層 (浅間板鼻褐色軽石群を含む) 中で、後期旧石器時代後半に相当する。

遺物は、2 つの石器集中から合わせて 46 点が出土した。製品は黒曜石製のナイフ形石器 2 点と搔・削器 1 点である。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に、基部周辺に調整加工を施したものであ



第3図 北坂遺跡の範囲と周辺の地形

る。1点は先端が厚く、一部に自然面が残されていることから、未製品の可能性が高い。搔・削器は幅広剥片の一部に刃部加工が施されている。

剥片類は、黒曜石・黒色頁岩・チャートが用いられている。縦長剥片を主体にするが、石刃状に整ったものは少なく、大きさも長さ5cm以下のものが多い。

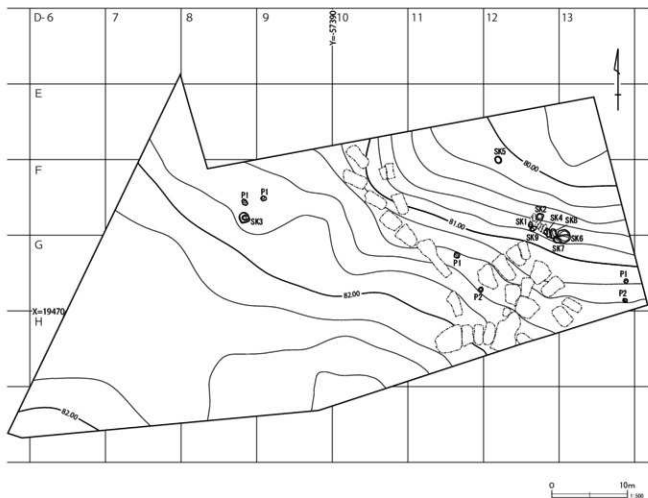
第2文化層の石器は、調査区東側のG－12グリッドから検出された。石器の出土したトレンチの周辺を、南北6m、東西6mの範囲に拡張し遺物の広がりを確認したが、他の石器は出土しなかった。遺物の出土した層位は、第2次調査の石器群と同じ第Ⅶ層（浅間板鼻褐色軽石群とATより下層の暗色帯）中で、後期旧石器時代前半期に相

当する。

縄文時代の遺構と遺物は、前期の土壌1基がE・F－12グリッドから検出された。出土遺物は、諸磯a式期の土器片である。また、グリッドから早期と前期の土器片と剥片が出土した。

中・近世の遺構は、時期不明の土壌8基とビット6基が検出された。土壌は調査区西側から第3号土壌が単独、調査区東側で第1・2・4・6～9号土壌がまとまって検出された。土壌から遺物は出土しなかった。ビットは調査区西側と東側、東端部からそれぞれ2基検出されている。ビットに伴う出土遺物はない。

中世の遺物は、グリッドから陶器の破片が少量出土したが、遺構に伴うものではない。



第4図 調査区全体図

IV 遺構と遺物

1. 旧石器時代

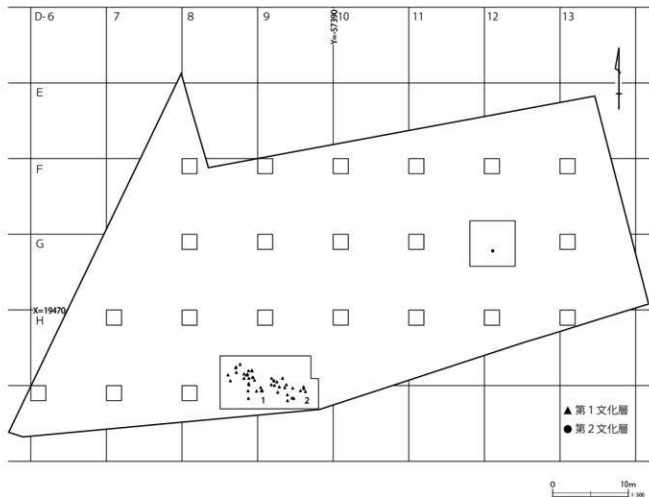
第2次調査で後期旧石器時代前半期の良好な石器群が検出されていることから、第3次調査でも旧石器の遺構・遺物が検出されることが想定された。そこで、縄文時代以降の調査終了後、10mグリッドの北西コーナーに2m四方のトレンチを設定し、ローム層の掘削を行った。その結果、I-9グリッドとG-12グリッドから石器が検出された。

I-9グリッドでは、第V層中から石器が検出された。H・I-8・9グリッドに跨る南北7m、東西12mの範囲を第VII層上面まで掘削した。また、東側に幅1m長さ4mのトレンチを設定し、

石器分布が東側に広がらないことを確認した。石器の出土層位を確認するため、南壁面と東壁面に沿って幅1mのトレンチを設定し第VIII層まで掘削した。

石器集中が2箇所検出され、石器46点が出土した。礫は検出されなかった。

G-12グリッドでは、第VII層（暗色帯）中から石器が1点出土した。第2次調査で検出された石器群と同じ層位であることから、石器分布の広がりに注目し、トレンチをF・G-11・12グリッドに跨る6m×6mの範囲に拡張し、第VIII層中まで掘削した。しかし、他には1点も出土せ



第5図 旧石器全体図

ず、単独出土であった。

(1) 基本土層 (第6図)

基本土層は、堆積状況が良好であった G-13

グリッド (第6図5) の土層断面で説明を行う。

第Ⅲ層 ソフトローム層である。径1mmの白色軽石を僅かに含む。

第Ⅳa層 ハードローム層である。褐色で固く締まっている。径1mmの白色軽石がブロック状に入る。白色軽石は火山灰の同定によって浅間板鼻黄褐色軽石 (As-YP) に対比された。

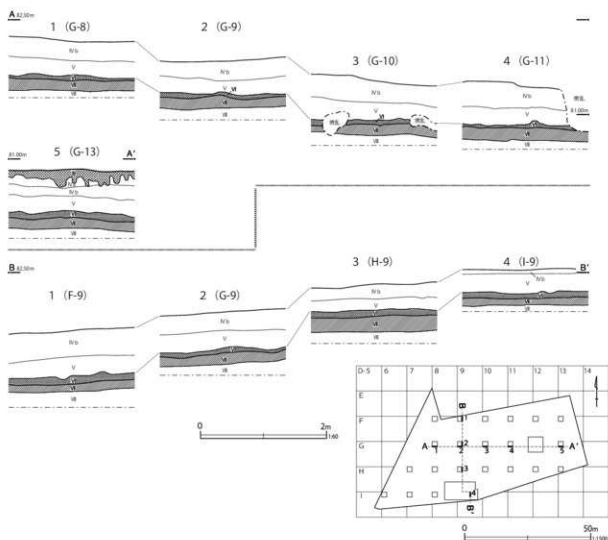
第Ⅳb層 ハードローム層である。褐色土で固く締まっている。色調は第Ⅳa層よりやや暗い。

第Ⅴ層 ハードローム層である。第Ⅳ層より色調はやや暗い。橙～褐色の軽石がブロック状に入る。

第Ⅵ層 橙～褐色の軽石が濃密に入っている。層厚は10cm程度と薄い。第Ⅳ・Ⅴ層に比べ粒径が粗く、不整合面になっている。橙～褐色の軽石は火山灰同定によって浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP) に対比される。最下部から僅かであるが、バブル型火山ガラス (AT) が検出された。

第Ⅶ層 暗色帯である。粘性が強く非常に締まっている。武蔵野台地の第2黒色帯に対比されと考えられる。

第Ⅷ層 暗褐色の固い粘土層である。色調は第Ⅶ



第6図 基本土層

層とあまり変わらないが、断面を見ると楔状の亀裂が多く入り、灰黄色粘土層が入り込んでいる。平面的には、亀裂は亀甲状になっている。石器は本層からは出土していない。

調査区の現地形は、南西部の丘陵縁辺部が標高82 mと高く、北東部に向かって緩やかな斜面になっている。低い部分は標高80 mを下回っている。

土層の堆積状況では、南西部と北側の緩斜面部は第IVb層まで削平されているが、調査区東側の標高81 m付近では第III層のソフトロー層が残っている。第IV層は上下層に細分できるが、第2次調査の層位との整合させるため、第IVa層と第IVb層として表記した。

(2) 旧石器時代の文化層

北坂遺跡第3次調査では、2つの石器文化層が確認できた。

第1文化層は、第V層の下部を中心に検出された。遺物の出土レベルは、約20 cmの幅がある。

第2文化層は単独出土で、第VII層から検出された。

(3) 第1文化層

調査区南側のH・I-8・9グリッドを対象に、南北7 m、東西12 mの範囲を第VI層上面まで掘削した。また、東側に幅1 m長さ4 mのトレンチを設定し、石器分布の範囲を確認した。さらに、石器の出土層位を確認するため、南壁面と東壁面に沿って幅1 mで第VII層まで掘削した。

石器集中は、2箇所検出された。遺物の出土層位は第V層中である。出土した石器総数は46点で、礫は検出されなかった。

第1号石器集中(第7図)

H・I-8、I-9グリッドに位置する。遺物は南北約4.5 m、東西約4.5 mの範囲に、26点が散漫に分布している。器種の内訳はナイフ形石器2点、剥片13点、砕片11点である。石材は黒曜石が21点、黒色頁岩5点である。

ナイフ形石器は、分布範囲の中央部と北端部付近から出土している。黒色頁岩の接合資料は、南東部から出土し、接合距離は近接していた。

出土石器(第8・9図)

1はナイフ形石器である。先端部を欠損するが、平面形状は縦長の三角形を呈している。刃部は右寸である。素材剥片は、縦長剥片を下位に用いている。基端部に打面を残している。打面は正面からの細かい剥離が観察できる。調整加工は、両側縁の基部付近に施されている。

2はナイフ形石器である。平面形状は先端に向かって幅が広がり、厚くなっている。一部に自然面を残しており、未製品の可能性が高い。素材剥片は、縦長剥片を下位に用いており、基端部に打面を残している。調整加工は、左側縁に平坦剥離が施されている。

3は縦長剥片である。正面を構成する剥離面と主要剥離面の剥離方向が共通している。横断面は台形状を呈しており、連続して剥片剥離されたものと思われる。打面は複剥離面である。

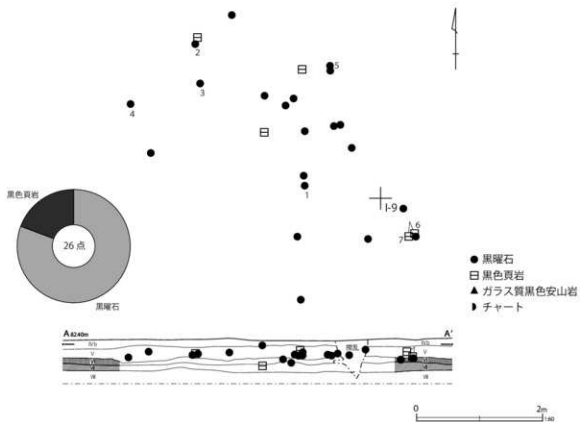
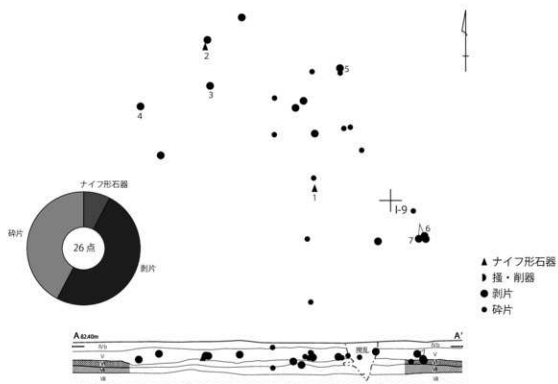
第1表 旧石器器種・石材組成表

第1号石器集中

	黒曜石	黒色頁岩	ガラス質 黒色安山岩	チャート	合計
ナイフ形石器	2	0	0	0	2
掻・削器	0	0	0	0	0
剥片	10	3	0	0	13
砕片	9	2	0	0	11
合計	21	5	0	0	26

第2号石器集中

	黒曜石	黒色頁岩	ガラス質 黒色安山岩	チャート	合計
ナイフ形石器	0	0	0	0	0
掻・削器	1	0	0	0	1
剥片	7	0	1	1	9
砕片	10	0	0	0	10
合計	18	0	1	1	20



第7図 第1号石器集中

4は縦長剥片である。正面を構成する剥離面と主要剥離面の方向は共通する。横断面は凸レンズ状を呈している。打面は自然面である。

5は縦長剥片である。正面に自然面を大きく残す。横断面は三角状を呈しており、角礫に近い原石のコーナー部分を剥離したものと思われる。

6は縦長剥片である。正面に自然面を多く残している。打面は大きく、単剥離面である。

7は縦長剥片である。正面に自然面を残している。打面は一部に新傷痕があり観察できないが、単剥離面と考えられる。

8は、6と7の接合資料である。接合距離は0.14mと近距離である。

石器石材は、1～5が黒曜石、6・7が頁岩である。

第2号石器集中 (第10図)

H・I-12グリッドに位置する。遺物は南北約3m、東西約4.8mの範囲に20点が散漫に

分布している。器種の内訳は掻・削器1点、剥片9点、碎片10点である。石材は黒曜石18点、ガラス質黒色安山岩1点、チャート1点である。

掻・削器は、石器集中の北西部から出土した。剥片と碎片は、偏りなく分布している。

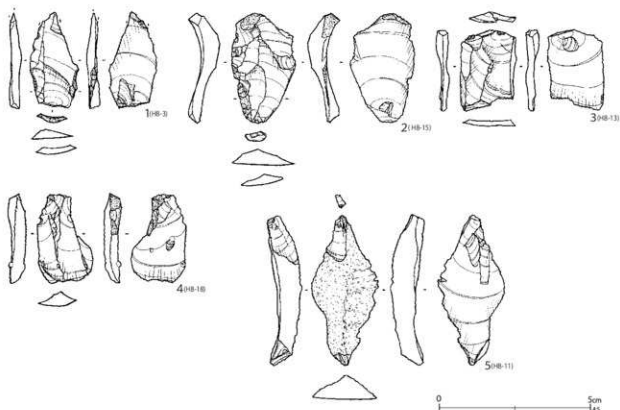
出土石器 (第11図)

1は掻・削器である。貝殻状の剥片を素材に、右下半部に刃部加工のための細かい剥離が施されている。正面を構成する剥離面は、主要剥離面の方向と一致していない。打面は自然面である。

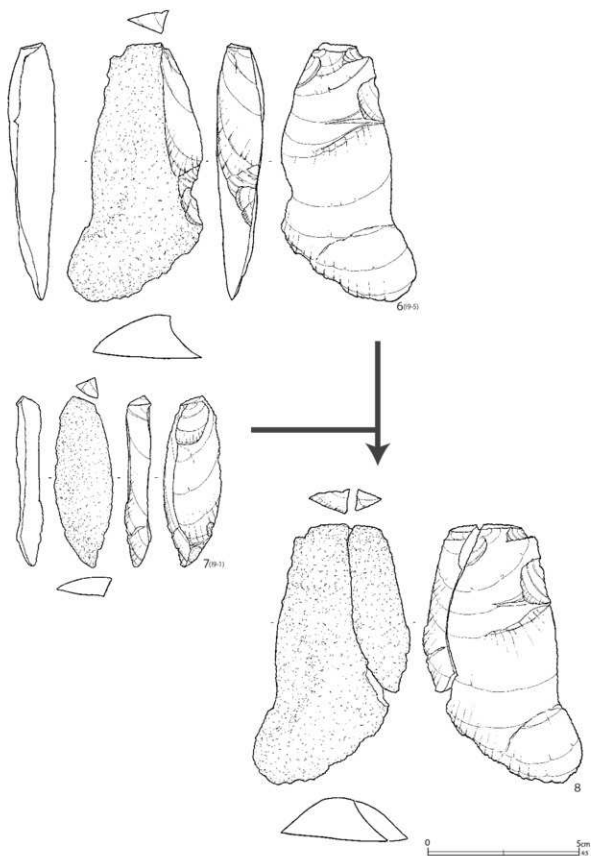
2は縦長剥片である。正面右側に自然面を大きく残す。横断面は三角形を呈し、厚手である。打面は小さく剥離方向は確認できなかった。

3は縦長剥片である。正面左側に自然面を大きく残す。正面の剥離面は、主要剥離面の方向と共通する。横断面は凸レンズ状を呈し、薄手である。打面は複剥離面である。

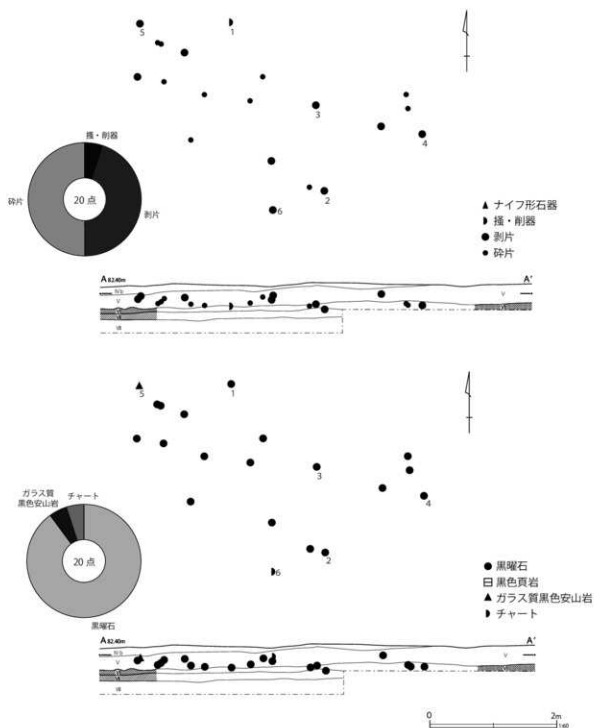
4は縦長剥片である。右側縁の一部を欠損する。



第8図 第1号石器集中出土石器(1)



第9图 第1号石器集中出土石器(2)

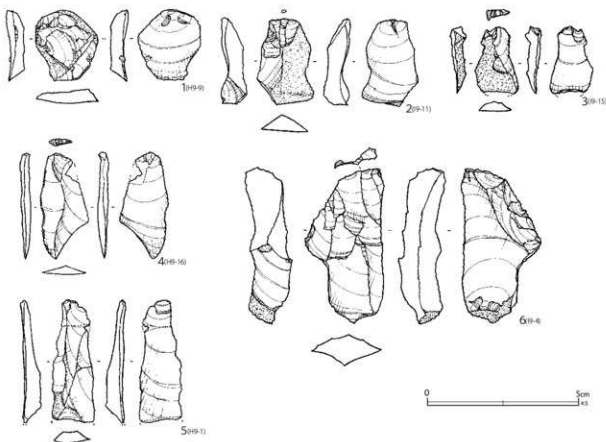


第10図 第2号石器集中

左側縁に微細な剥離が観察できるが、使用によるものかは不明である。正面の剥離面は、主要剥離面と同一方向の剥離面で構成されており、中央部に稜線が1本走っている。横断面は薄手で三角形を呈している。打面は正面方向からの微細な剥離が観察できる。

5は縦長剥片である。先端部は欠損している。左側下部に自然面を残す。打面は欠損している。

6は石核作業面の再生剥片と考えられる。作業面を正位として図化した。厚手の剥片で打面は自然面である。横断面は菱形を呈している。上面は幅狭であるが、正面剥離面（作業面）の打面と考



第 11 図 第 2 号石器集中出土石器

えられる。裏面上部の剥離面は、打面調整の一部と推定される。

石器石材は、1～4 が黒曜石、5 がガラス質黒色安山岩、6 がチャートである。

(4) 第 2 文化層

G-12 グリッドから、縦長剥片 1 点が検出された。出土層位は第Ⅶ層中である。

単独出土 (第 12 図)

石器の出土した G-12 グリッドを中心に、F・G-11・12 グリッドに跨る一辺 6 m 四方のトレンチを設定し、遺物分布の広がりを確認した。しかし、他に石器は検出されなかった。

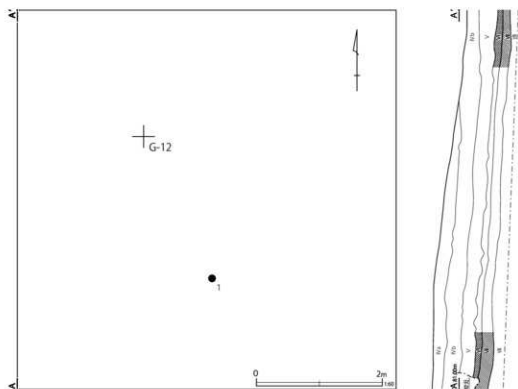
遺物が出土した地点は、北東に緩く傾斜しているため、トレンチの西面と北面で土層観察を行った。西面を観ると、現地表面の傾斜よりローム層

の堆積の傾斜の方が緩いことが分かる。南側では第Ⅳ a 層が確認できたが、北に向かって上層が削平され、北面では第Ⅳ b 層より下部しか観察できなかった。

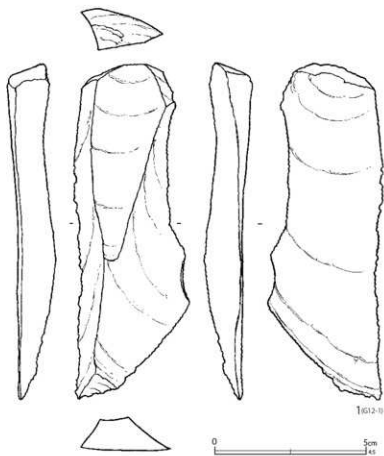
遺物の垂直分布は、西面の土層断面と出土地点と距離があるため、投影すると第Ⅷ層中になった。しかし、調査時の観察では第Ⅷ層中から出土していることが確認されており、誤解を避けるため地点は明記しなかった。

出土石器 (第 13 図)

1 はガラス質黒色安山岩の縦長剥片である。表面の風化が進んでおり、細かい剥離の観察はできなかった。正面の剥離面は、主要剥離面と同じである。打面は大きく単剥離面と思われる。



第12图 第2文化層石器出土状況



第13图 第2文化層出土石器

第2表 旧石器観察表

No.	遺物No	石器集中	X(m)	Y (m)	Z (m)	文化層	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図
1	H8-1	1	19461.62	-57401.84	82.385	1	V	C	Ob	0.28	0.48	0.20	0.08	8-1
2	H8-2	1	19462.90	-57402.36	82.271	1	V	F	Ob	2.47	(1.19)	0.32	0.63	
3	H8-3	1	19460.20	-57401.20	82.275	1	V	Kn	Ob	3.20	1.60	0.40	1.53	
4	H8-4	1	19462.04	-57401.24	82.302	1	V	C	B.Sh	1.63	0.92	0.35	0.47	
5	H8-5	1	19460.72	-57403.64	82.285	1	V	F	Ob	(2.34)	1.22	0.66	1.04	8-5
6	H8-7	1	19460.80	-57400.46	82.228	1	V	C	Ob	0.93	0.88	0.18	0.13	
7	H8-8	1	19461.14	-57400.74	82.220	1	V	C	Ob	0.05	0.39	0.06	0.02	
8	H8-9	1	19461.16	-57400.64	82.254	1	V	C	Ob	0.93	0.28	0.09	0.02	
9	H8-10	1	19462.02	-57400.80	82.233	1	V	C	Ob	1.10	0.37	0.08	0.03	8-3
10	H8-11	1	19462.10	-57400.80	82.236	1	V	F	Ob	4.90	2.20	1.10	6.37	
11	H8-12	1	19461.06	-57401.20	82.224	1	V	F	Ob	2.24	1.95	0.31	0.90	
12	H8-13	1	19461.82	-57402.86	82.250	1	V	F	Ob	2.50	1.90	0.40	1.69	
13	H8-14	1	19462.54	-57402.90	82.255	1	V	F	B.Sh	2.11	2.37	0.55	2.12	8-2
14	H8-15	1	19462.44	-57402.94	82.235	1	V	Kn	Ob	3.60	2.10	1.10	3.69	
15	H8-16	1	19460.36	-57401.22	82.235	1	V	C	Ob	1.55	1.32	0.20	0.25	
16	H8-17	1	19461.47	-57401.51	82.160	1	V	F	Ob	(2.15)	(1.07)	0.46	0.88	
17	H8-18	1	19461.49	-57403.96	82.195	1	V	F	Ob	3.00	1.80	0.60	2.21	8-4
18	H8-19	1	19461.58	-57401.38	82.105	1	V	F	Ob	(1.67)	(0.83)	0.33	0.47	
19	H8-20	1	19461.04	-57401.84	82.060	1	V	C	B.Sh	1.43	1.57	0.42	0.82	
20	H9-1	2	19461.04	-57398.20	82.358	1	V	F	G.An	(4.10)	1.50	0.70	2.72	
21	H9-2	2	19460.20	-57398.24	82.310	1	V	F	Ob	1.50	1.47	0.37	0.61	11-5
22	H9-3	2	19460.12	-57397.82	82.320	1	V	C	Ob	(1.57)	0.94	0.46	0.35	
23	H9-4	2	19460.58	-57397.50	82.337	1	V	F	Ob	(1.31)	1.98	0.42	1.04	
24	H9-5	2	19460.72	-57397.87	82.270	1	V	C	Ob	1.13	2.15	0.63	0.98	
25	H9-6	2	19460.74	-57397.92	82.240	1	V	C	Ob	(0.55)	1.05	0.15	0.06	11-1
26	H9-8	2	19460.20	-57396.26	82.345	1	V	C	Ob	(1.45)	1.18	0.25	0.36	
27	H9-9	2	19461.06	-57396.76	82.200	1	V	Sc	Ob	2.30	2.10	0.60	2.23	
28	I8-1	1	19459.36	-57400.20	82.315	1	V	F	Ob	(1.50)	1.37	0.40	0.60	
29	I8-2	1	19459.40	-57401.32	82.237	1	V	C	Ob	(1.25)	1.20	0.17	0.16	9-7
30	I8-3	1	19458.40	-57401.26	82.220	1	V	C	Ob	1.10	1.62	0.22	0.32	
31	I9-1	1	19459.40	-57399.55	82.284	1	V	F	B.Sh	6.70	2.30	1.00	17.04	
32	I9-2	2	19459.20	-57397.40	82.232	1	V	C	Ob	(0.88)	0.99	0.32	0.23	
33	I9-3	2	19459.92	-57397.18	82.210	1	V	C	Ob	1.36	0.86	0.35	0.24	11-6
34	I9-4	2	19458.10	-57396.10	82.374	1	V	F	Ch	5.10	2.60	1.60	14.04	
35	I9-5	1	19459.44	-57399.46	82.205	1	V	F	B.Sh	10.20	5.40	1.90	88.62	
36	I9-6	2	19458.87	-57396.12	82.300	1	V	F	Ob	2.28	2.07	0.35	1.15	
37	I9-7	2	19459.82	-57396.46	82.250	1	V	C	Ob	1.88	1.19	0.47	0.89	9-6
38	I9-8	1	19459.84	-57399.64	82.160	1	V	C	Ob	1.05	1.20	0.21	0.15	
39	I9-9	1	19459.40	-57399.44	82.180	1	V	F	Ob	1.93	1.52	0.47	1.02	
40	I9-10	2	19459.75	-57395.42	82.230	1	V	F	Ob	2.78	0.60	0.35	0.51	
41	I9-11	2	19458.40	-57395.28	82.148	1	V	F	Ob	2.80	1.90	0.90	3.05	11-2
42	I9-12	2	19458.46	-57395.52	82.202	1	V	C	Ob	0.95	1.13	0.39	0.34	
43	I9-13	2	19459.92	-57393.99	82.240	1	V	C	Ob	(1.35)	0.78	0.38	0.28	
44	I9-14	2	19459.70	-57393.96	82.215	1	V	C	Ob	0.45	0.46	0.09	0.01	

No.	遺物No.	石器集中	X(m)	Y (m)	Z (m)	文化層	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図
45	I9-15	2	19459.42	-57394.38	82.390	I	V	F	Ob	2.20	1.40	0.50	0.92	11-3
46	I9-16	2	19459.30	-57393.73	82.214	I	V	F	Ob	3.50	1.60	0.30	1.27	11-4
47	G12-1		19477.76	-57368.92	80.293	II	2	F	G.An	11.10	3.80	1.60	54.85	13-1

2. 縄文時代

(1) 土壌

第5号土壌 (第14図)

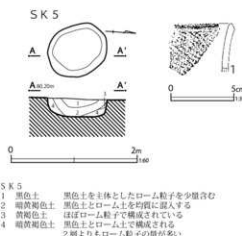
E・F-12グリッドに位置する。長軸0.96 m、短軸0.78 m、深さ0.26 mの楕円形である。遺物は、縄文時代前期の土器片1点が出土した。

第14図1は、縄文時代前期諸磯a式期の口縁部破片である。内面の整形は丁寧にされている。外面は単節RLの横位施文である。

(2) グリッド出土遺物 (第15図)

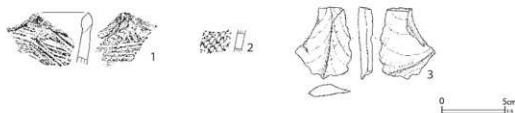
1は縄文時代早期の条痕文土器である。口縁部破片で、波状口縁になる。内外面に明瞭な条痕が施されている。条痕文土器群の前半期と思われる。

2は縄文時代前期諸磯a式期の胴部破片である。外面は単節RLの横位施文である。



第14図 第5号土壌・出土遺物

3はホルンフェルス製の剥片である。長さ5.5 cm、幅4.5 cm、厚さ1.2 cm、重さ23.6 gである。打面は自然面である。先端はヒンジフラクチャーを起こしている。



第15図 グリッド出土遺物

3. 中・近世

(1) 土壌

土壌は8基検出された。調査区西側のF-8グリッドから第3号土壌が単独で見つかった。調査区東側のF・G-12・13グリッドには第1・2・4・6～9号土壌が集中していた。出土遺物がなく、時期は不明である。

第1号土壌 (第16図)

F-12グリッドに位置する。長軸0.64 m、

短軸0.53 m、深さ0.46 mを測る。平面形状は楕円形である。

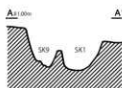
第2号土壌 (第16図)

F-12グリッドに位置する。長軸0.88 m、短軸0.80 m、深さ0.43 mを測る。平面形状は楕円形である。

第3号土壌 (第16図)

F-8グリッドに位置する。長軸1.36 m、短

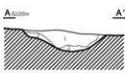
SK 1・SK 9



SK 2



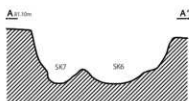
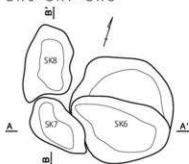
SK 3



SK 4



SK 6・SK 7・SK 8



SK 2

1 褐色土と黒色土が互層に入る しまりなく砂質

SK 3

1 暗褐色土 ローム粒子を多く含む しまりなく砂質
2 褐色土 ロームブロック

F-8 P1



F-9 P1



G-11 P1



G-11 P2



G-13 P1



G-13 P2



第16図 土壌・ピット

軸 1.24 m、深さ 0.29 m を測る。平面形状は隅丸方形で、東側が僅かに深くなっている。

第4号土壌 (第16図)

F・G-12グリッドに位置する。長軸 1.37 m、短軸 0.86 m、深さ 0.62 m を測る。平面形状は上面が不整形で、北西部が隅円形状に深くなっている。

第6号土壌 (第16図)

F・G-12・13グリッドに位置する。長軸 1.70 m、短軸 1.67 m、深さ 0.53 m を測る。平面形状は隅円形で、掘り込みは2段になっている。

第7号土壌 (第16図)

G-12・13グリッドに位置する。長軸 1.18 m、短軸 0.64 m、深さ 0.80 m を測る。平面形状は隅円形である。

第8号土壌 (第16図)

F・G-12グリッドに位置する。長軸 1.26 m、短軸 0.76 m、深さ 0.70 m を測る。平面形状は隅丸方形である。

第9号土壌 (第16図)

F-12グリッドに位置する。長軸 0.82 m、短軸 0.54 m、深さ 0.38 m を測る。平面形状は隅丸方形である。

(2) ビット

ビットは6基検出された。分布は調査区西側、東側と東端部からそれぞれ2基検出されている。

第3表 ビット計測一覧表

グリッド	ビットNo.	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
F-8	1	0.86	0.60	0.25	
F-9	1	0.74	0.60	0.28	
G-11	1	0.72	0.67	0.44	
	2	0.66	0.57	0.23	
G-13	1	0.58	0.48	0.28	
	2	0.55	0.46	0.29	

ビットに伴う出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) グリッド出土遺物 (第17図)

中近世の遺物は極めて少ない。グリッドから、陶器の破片が2点採集された。

1は甕の底部破片である。底面は砂目底で、無調整である。胴部外面は縦方向のヘラナデが施され、僅かにヨコナデが加えられて最終調整とされているが、一部に先行して施された斜方向のヘラナデも認められる。また、底部に近い部分には、指頭圧痕が多く確認される。内面は丁寧なヨコナデで仕上げられている。色調は橙色味が強く、胎土には長石、石英等の混入物が多く見られる。

2は甕の胴部下位破片である。胎土・調整・焼成等から、1と同一個体の破片と推定される。内面は指頭圧痕とヨコナデ、外面は斜方向のヘラナデ後にヨコナデを加えて調整される。

1・2ともに常滑産で、16世紀頃の製品と考えられる。



第17図 グリッド出土遺物

第4表 グリッド出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	押戻
1	陶器	甕	—	[5.4]	(12.4)	長石 石英	5	普通	橙色	常滑 16 C	
2	陶器	甕	—	[8.1]	—	長石 石英	5	普通	橙色	常滑 16 C	

V 自然科学分析

北坂遺跡は、埼玉県北西部の松久丘陵上に位置する。今回の調査では、旧石器時代の石器群が時期の異なる2つの層位から検出され、石器群と出土層位の関係を明確にすることが課題になった。

埼玉県北西部は、旧石器時代の調査事例が少なく、ローム層及び火山灰の自然科学分析は殆ど行われていない。また、当該地域は、富士・箱根系

を給源とする南関東系の火山灰と、浅間山・榛名山を給源とする北関東系が交差する地域として重要な位置にある。特に浅間山の火山灰は、南関東と北関東の石器群を結ぶための鍵層になると考えられる。そこで、重鉱物組成、火山ガラス比分析、屈折率測定、テフラの検出同定を委託して実施した。

1. 重鉱物組成、火山ガラス比分析、屈折率測定、テフラの検出同定

はじめに

北坂遺跡（埼玉県深谷市本郷字北坂地内）は、埼玉県北西部に分布する松久丘陵の南縁部緩斜面上に位置する。松久丘陵を構成する地層は、主に新第三紀中新世の砂岩・泥岩・凝灰岩であり、丘陵は残丘状の地形を呈している（堀口 1986）。調査区の位置する丘陵周縁の緩斜面地は、周辺の沖積低地より地形的な高まりとなっていることから、沖積低地よりも早い時期に離水し、その表層には風成土壌であるローム層が形成されたことが考えられる。杉山ほか（2009）では、調査区の位置する松久丘陵の周囲にL2面とした低位段丘面の分布を記載している。L2面の離水年代は約3万年前とされており、調査区の位置する緩斜面も同様の地形面に対比されたと考えられた。第2次調査におけるローム層の分析では、ローム層下部より約3万年前に降灰したとされる始良Tn火山灰（AT：町田・新井 1976/2003）の降灰層準が検出され、上述した低位段丘面の離水年代をほぼ確認することができた。

第3次調査では、後期旧石器時代とされる遺物が、第2次調査で確認されたローム層よりも上位の層位から出土したことから、第3次調査区内においても、その出土層位を分析により検証する必要がある。いわゆる関東ローム層と呼ばれる土層のうち、武蔵野台地などの南関東の台地上の

ローム層は、富士山や箱根火山を給源とする火山碎屑物が母材の主体となっているが、群馬県などの関東北西部のローム層は浅間山や榛名山などを給源とする火山碎屑物が母材の主体となっている。本遺跡付近のローム層は、その地理的位置により、両者の混在する火山碎屑物を母材としており、そのためにテフラの産状や重鉱物組成の層位的な変化などは、比較的近い地域間でもその違いが大きいことがある。したがって、旧石器時代の遺物が出土した場合のローム層層序は、北関東と南関東との比較をする上でも重要な指標となる。

深谷市および寄居町地域の旧石器時代遺跡は、埼玉県最古段階の遺物が出土した寄居町末野遺跡と北方系の細石器石器群が出土した深谷市白草遺跡が著名である。ただし、これら以外に確認された旧石器時代の遺跡の数は少なく、旧石器時代遺物包含層の層位を分析により検証した事例も非常に少ない。上述したように北坂遺跡の第3次調査では、第2次調査とは異なるローム層の層位から遺物が出土しており、今回の分析事例は、この地域における旧石器時代遺跡において非常に意義のあるものと考えられる。

本報告では、第2次調査区と同様の石器出土層準のテフラの産状を確認し、さらにその結果を基準として第3次調査における石器出土層準の比較検討を行った。

1. 試料

試料は、第3次調査区内の3箇所の土層断面から採取した。ここでは、各断面の位置するグリッドを地点名とし、I-9グリッド、G-12グリッド、G-13グリッドとする。以下に、各地点について述べる。

(1) I-9グリッド

本地点では、検出面から深度約70 cmまでのローム層の断面が確認された。第3次調査区内の土層断面については、発掘調査所見により上位より第1層から第Ⅷ層までの分層がなされているが、本地点では第Ⅳb、V、VI、Ⅶ、Ⅷの各層に分層されている(第18図)。

第Ⅳb層と第Ⅴ層は、いずれも褐色を呈するシルト質のロームであり、径1 mm程度の軽石が微量散在する。第Ⅴ層の方がやや暗い色調を呈する。第Ⅵ層は、径2～3 mmの粘土化した降下軽石層がブロック状に堆積する層位であり、基質は暗褐色の砂混じりシルト質ロームである。なお、第Ⅵ層の降下軽石層は、第2次調査における分析により浅間火山を給源とする浅間板鼻褐色軽石群(As-BP: 新井 1962)に対比している。第Ⅶ層は暗灰褐色を呈する砂混じりのシルト質ロームであり、第Ⅷ層は暗褐色を呈する砂混じりのシルト質ロームである。第Ⅶ層は、第2次調査において後期旧石器時代の遺物包含層とされた層位である。また、第Ⅷ層中には鉛直方向に多数の亀裂が入り、この亀裂の平面形は網目状を呈する。また、亀裂内には灰黄色を呈する粘土質シルトが充填する。

試料は、検出面から断面最下部(第Ⅳb層～第Ⅷ層)までを対象とし、上位より厚さ5 cm連続として試料番号1～13までの計13点を採取した(第18図)。本地点では、第Ⅳb、V、Ⅶ、Ⅷの各層より1点ずつ(試料番号2・5・11・13)計4点について重鉱物分析を実施し、第2次調査でATの検出された第Ⅵ層を中心にして試料番号6～9の計4点について火山ガラス比

析を実施する。

(2) G-12グリッド

本地点は、検出面から深度約1 mまでのローム層の断面が確認され、第Ⅳa、Ⅳb、V、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷの各層に分層されている(第18図)。第Ⅳa層は径1 mm程度の軽石が微量散在する褐色のシルト質ロームであり、第Ⅳb層よりもやや明るい色調であることから分層されている。第Ⅳb層以下の各層は、上述したI-9グリッドの各層と同様である。第3次調査では、第Ⅳa層および第Ⅳb層から旧石器時代の遺物が出土している。

試料は、検出面直下の第Ⅳa層から第Ⅴ層下部までを対象とし、上位より厚さ5 cm連続として試料番号1～12までの計12点を採取した(第18図)。本地点では、遺物が出土した第Ⅳa層から第Ⅴ層上部までの試料4点(試料番号2・5・7・9)を対象として、重鉱物分析および火山ガラス比分析を実施する。

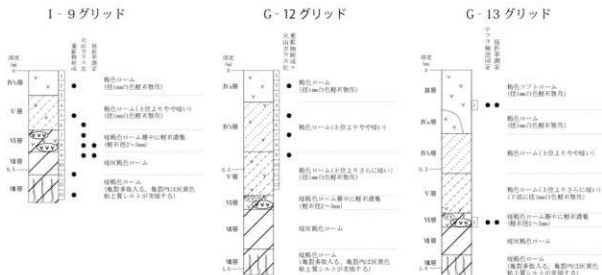
(3) G-13グリッド

本地点は、検出面から深度約1 mまでのローム層の断面が確認され、第Ⅲ、Ⅳa、Ⅳb、V、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷの各層に分層されている(第18図)。第Ⅲ層は径1 mm程度の軽石が散在する褐色のシルト質ロームであり、締まりのないいわゆるソフトローム様を呈する。第Ⅳa層以下の各層については、上述したI-9グリッドおよびG-12グリッドの各層と同様である。

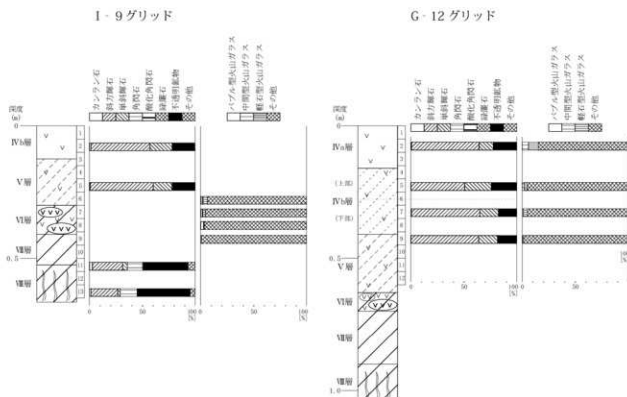
試料は、軽石の散在する第Ⅲ層から1点(試料番号1)、降下軽石層の堆積する第Ⅵ層から1点(試料番号2)を採取した。本地点では、これらの2試料について、テフラの検出同定を実施する。

2. 分析方法

今回の調査対象とされた遺物包含層は、第2次調査と同様のローム層であることから、前報(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第425集『北坂遺跡Ⅱ』参照)と同様の分析手法を用いる。以下に、各分析の処理過程を述べる。



第18図 土層断面柱状図



第19図 重鉱物組成及び火山ガラス比

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、

篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、

不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

さらに本分析では火山ガラスおよび斜方輝石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(2) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスの形態分類は、上述した火山ガラス比分析と同様である。

3. 結果

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析

重鉱物・火山ガラス比分析結果を第5表、第19図に示す。以下、地点ごとに重鉱物組成と火山ガラス比の産状について述べる。

1) I-9グリッド

a. 重鉱物組成

試料番号2・5は斜方輝石が最も多く、50～60%を占め、他に20%程度の単斜輝石と不透明鉱物を伴い、極めて微量のカンラン石を含む。一方、試料番号11・13では不透明鉱物が最も多く、40～50%を占め、次いで斜方輝石が多く、20～30%程度を占める。他に少量の角閃石と微量のカンラン石および単斜輝石を含む。

b. 火山ガラス比

試料番号6～8には、微量のバブル型火山ガラスと軽石型火山ガラスが含まれ、試料番号9には極めて微量のバブル型火山ガラスが含まれる。微量ではあるがバブル型火山ガラスは試料番号8に多い傾向が窺える。

2) G-12グリッド

a. 重鉱物組成

試料4点(試料番号2・5・7・9)はともに斜方輝石が最も多く、50～60%を占め、他に10～20%程度の単斜輝石と不透明鉱物を伴う。詳細にみれば、試料番号5は他の試料に比べて斜方輝石の量比が低く、単斜輝石の量比が高いことが指摘できる。

b. 火山ガラス比

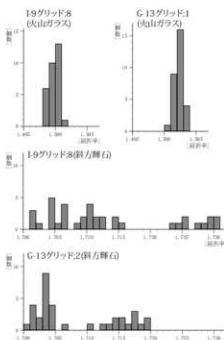
試料番号2には少量、試料番号5には微量、試料番号9には極めて微量のそれぞれ中間型火山ガラスと軽石型火山ガラスが含まれ、試料番号7には極めて微量のバブル型火山ガラスと微量の軽石型火山ガラスとが含まれる。

(2) テフラの検出同定

砂分の観察結果を第6表に示す。G-13グリッドの2試料(試料番号1・2)はともに砂粒の主体は白色を呈する斜長石の遊離結晶と黒色を呈する両輝石の遊離結晶である。これらに加えて、試料番号1には少量の火山ガラスと極めて微量の軽石も含まれる。軽石は、最大径約1.8mm、白色で発泡は良好～やや良好である。火山ガラスは、無色透明の軽石型により構成されている。

第5表 重鉱物・火山ガラス比分析結果

			カンラン石	斜方輝石	黒斜輝石	角閃石	酸性角閃石	緑輝石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中酸型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
地点名	試料番号															
I-9 グリッド	2	4	139	53	0	0	0	0	52	2	250	-	-	-	-	-
	5	2	149	44	2	0	0	0	53	0	250	-	-	-	-	-
	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	10	234	250
	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	6	239	250
	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	0	2	241	250
	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0	0	248	250
	11	7	72	11	36	0	2	105	17	250	-	-	-	-	-	-
	13	4	63	6	40	1	1	123	12	250	-	-	-	-	-	-
G-12 グリッド	2	2	159	34	0	0	0	0	54	1	250	0	15	23	212	250
	5	0	127	63	0	0	0	0	59	1	250	0	5	7	238	250
	7	1	162	44	0	0	0	0	43	0	250	3	0	9	238	250
	9	0	160	45	1	0	0	0	44	0	250	0	1	2	247	250



第20図 火山ガラス及び斜方輝石の屈折率

第6表 テフラ分析結果

地点名	試料番号	スコリア	火山ガラス		軽石			備考
			量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
G-13 グリッド	1	-	++	cl・pm	(+)	W・g ~ sg	1.8	砂粒の主体は斜長石と角閃石の遊離結晶
	2	-	-	-	-	-	-	砂粒の主体は斜長石と角閃石の遊離結晶

<凡例>

-:含まれない, (-):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量。

W:白色。

g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm。

cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

(3) 屈折率測定

測定に供した試料は、I-9グリッドが試料番号8の火山ガラスと斜方輝石、G-13グリッドが試料番号1の火山ガラスと同グリッドの試料番号2の斜方輝石の計4点である。これらの測定結果を第20図に示す。

I-9グリッドの試料番号8の火山ガラスは、n_{1.497-1.501}のレンジを示し、n_{1.499-1.500}に集中する。G-13グリッドの試料番号1の火山ガラスは、n_{1.500-1.503}のレンジを示し、n_{1.501-1.502}に集中する。また、I-9グリッドの試料番号8の斜方輝石は、 γ 1.701-1.730

までのかなり広いレンジを示すが、 γ 1.701-1.715までの低屈折率のレンジと γ 1.723-1.730の高屈折率のレンジとに分かれる傾向が読み取れる。G-13グリッドの試料番号2の斜方輝石も、 γ 1.700-1.719までの広いレンジを示すが、 γ 1.700-1.706までの低屈折率のレンジと γ 1.710-1.719までの高屈折率のレンジとに分かれる傾向が読み取れる。

4. 考察

北坂遺跡の第2次調査区における分析では、第3次調査区の第VI層に相当する降下軽石層の認められる層位の最下部にATの降灰層準が検出

された。今回の第3次調査区においても、I-9グリッドの分析により、第VI層最下部にバブル型火山ガラスが検出され、その屈折率を確認することができた。これらの結果とAs-BPとの層位関係から、I-9グリッドの第VI層最下部で検出されたバブル型火山ガラスはATに由来すると判断される。前報でも述べたように、関東地方北西部における標準的なローム層ではATはAs-BP下部よりさらにローム層を挟んで下位に堆積している(町田・新井 1976)。本地点におけるATの産状は、As-BPとの混交した状態を示しており、この産状は第2次調査区と同様である。なお、これまでの分析例からは、ATの降灰層準は、武蔵野台地では第2暗色帯(BB II)上部(標準層序の第VIII層)の最上部、大宮台地でも立川ローム層相当のローム層中部に1枚認められる暗色帯の最上部に検出されることが多い。したがって、本地点における第VII層上部の層位は、武蔵野台地の立川ローム層の第VIII層にほぼ対比され、大宮台地の立川ローム層相当中部に1枚認められる暗色帯にほぼ対比される。

本地点の第VII層下部から第VIII層にかけては、ATよりも下位のローム層に対比されることは確実であるが、現時点ではそれ以上の詳細な対比資料は得られていない。本遺跡におけるローム層の重鉱物組成は、武蔵野台地や大宮台地に比べてカンラン石の量比が圧倒的に少ないこととその理由としてカンラン石の供給源である富士山から遠いこと、水の影響による変質によりカンラン石が溶失していることなどを第2次調査の分析報告の中で述べた。これらの状況は第3次調査区においても変わらないが、そのような中でI-9グリッドの試料番号11ではカンラン石の量比がやや高いという特徴が指摘できる。この重鉱物組成は、武蔵野台地の立川ローム層においてカンラン石の量比の高い層位であることが反映されている可能性がある。これまでの武蔵野台地の立川ローム層

の分析例からは、ATよりも下位で特にカンラン石の量比の高い層位として、標準層序の第X層上部があげられる。したがって、本地点の第VII層下部から第VIII層上部にかけての層位は、武蔵野台地の立川ローム層標準層序の第X層上部付近に対比される可能性がある。

なお、第3次調査区内の第VIII層全体には、試料の項で述べたように特徴的な亀裂構造が認められている。このような構造は土壤構造の一種であると考えられるが、現時点ではその成因の詳細は明らかではない。上述した第VIII層の対比に従えば、第VIII層が表層土壌であった時期は最終氷期の前半頃に相当し、網目状を呈する平面形などは、周米河地域の凍土で認められることの多いいわゆる構造土にも類似するが、北坂遺跡の地理的な位置を考慮すると凍土との関連性は低い。ただし、地下水などの水分条件によっては、冬季の霜柱の生成と融解といった程度の作用が特異的に及んだ可能性はあるのかもしれない。

第VI層中の降下軽石層については、今回の分析では軽石を検出することができなかったが、斜方輝石の屈折率の値から、As-BPに対比することは確実である。軽石は粘土化が著しいために処理後に残存することがなかったと考えられる。また、斜方輝石の屈折率のレンジの幅の広さは、As-BPのなかでの降下ユニットによる値の違いを示していると考えられる。町田・新井(2003)には、その値は上部・中部・下部として示されており、今回のG-13グリッドの試料番号2の斜方輝石の値は、それらとよく一致する。なお、I-9グリッドの試料番号8の斜方輝石の屈折率の値のうち、高屈折率としたレンジの値は、As-BPの値とは有意に異なっている。このような値の斜方輝石は、町田・新井(2003)による記載などから関東地方に分布する火山の火山噴出物に由来するものではなく、おそらく混在するATに由来する可能性がある。関東地方のように給源から離れた

地域では、ATに由来する重鉱物の結晶が認識されることはほとんどないため、今回の結果は非常に珍しい事例であると言える。

また、I-9およびG-12グリッドの第V層から第IVb層および第IVa層にかけては、両輝石の優占する重鉱物組成が注目される。とくにG-12グリッドの第IVb層上部における単斜輝石の量比の高い組成は、層序対比の指標になると考えられる。今回の分析では、I-9グリッドの第IVb層についても分析を行ったが、両地点の重鉱物組成の比較から、I-9グリッドの第IVb層は、G-12グリッドの第IVb層下部に対比されるといえる。

なお、武蔵野台地の立川ローム層では、他の層位に比べると両輝石の量比の高い層位が、標準層位の第IV層下部から第V層にかけて認められており、特に第V層直上ではその割合が最も高くなり、良好な対比指標とされている（矢作・橋本2012）。G-12グリッド第IVb層上部における単斜輝石の量比の高い重鉱物組成は、層位的にこの重鉱物組成に対比される可能性がある。その場合、第3次調査区における第IVb層は、武蔵野台地の立川ローム層標準層序の第IV層下部から第

V層上部にかけての層位に対比される可能性があると考えられる。

G-13グリッドの第III層からは、軽石型火山ガラスと軽石を検出することができた。軽石型火山ガラスは、その形態と屈折率から、南関東において立川ローム層上部ガラス質テフラ（UG:山崎1978）と呼ばれているテフラに由来すると考えられ、軽石は、その特徴と火山ガラスと混在する産状とから、浅間火山の軽石流期のテフラである浅間板鼻黄色軽石（As-YP:新井1962）に由来すると考えられる。As-YPの噴出年代は、暦年で1.5～1.6万年前とされており、UGは浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部とされているテフラである（町田・新井2003）。また、G-12グリッドの第IVa層で少量検出された中間型および軽石型火山ガラスもその形態的特徴から、UGに由来すると考えられる。おそらく土壌中における上位からの碎屑物の拡散を示していると考えられる。なお、G-13グリッドの第III層における白色軽石は、第III層中に一様に拡散しているため、第III層中におけるAs-YPの詳細な降灰層準の推定には至らない。

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四系地層」『群馬大学要自然科学編 10』pp.1-79
- 古澤 明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌 101』pp.123-133
- 堀口萬吉 1986 「埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史 別編 3 自然』埼玉県 pp.7-74
- 町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—」『科学 46』pp. 339-347
- 町田 洋・新井房夫 2003 「新編 火山灰アトラス」東京大学出版会 336p.
- 杉山雄一・新谷加代・宮脇理一郎・宮脇明子 2009 「平井・櫛挽断層帯（関東平野北西縁断層帯）の地形及びボーリング調査による断層分布及び活動性の再検討」『断層・古地震研究報告 9』pp.79-111
- 矢作健二・橋本真紀夫 2012 「重鉱物組成と火山ガラス比による武蔵野台地の立川ローム層層序対比」『新近地文化 2』pp.7-18
- 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四系後期の運動」『第四系研究 16』pp.231-246

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

北坂遺跡第2・3次調査は、寄居PAスマートインターチェンジ建設事業に伴う発掘調査である。第3次調査は東日本高速道路株式会社委託分で、第2次調査の区画に囲まれている。

旧石器時代の遺構・遺物は、第2・3次調査で検出された。第3次調査では、上下異なる層位から石器群が検出され、複数時期の石器群の存在が確認された。また、第2・3次調査でローム層の自然科学分析を実施し、考古学による分層とテフラ・重鉱物組成比との関係が明らかとなり、北関東と南関東を結ぶ当該地域における、旧石器時代の様相、石器編年の解明が進められた。

旧石器時代の遺構・遺物は松久丘陵の南縁部、沖積低地をのぞむ平坦部から見つかっている。第2次調査では、調査区南端部から後期旧石器時代前半期の良好な石器群が出土した。第3次調査では、調査区南端部から後期旧石器時代後半期の石器集中と、少し離れて前半期の石刃が単独で検出された。(第21図)。

第2次調査では、埼玉県で調査例の少ない前半期の良好な石器群が検出された。埼玉の地を最初に開拓した人々の様相を知る貴重な資料である。

第3次調査は、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP)を含む層位から石器群が検出された。埼玉県の石器編年では第Ⅳ期(埼玉考古学会 1977)に相当する。この時期は、浅間山が大規模な噴火を繰り返し、外輪山の一つ黒斑山の山体崩壊による前橋泥流によって、古利根川の流路が大きく変更している。これにより、当該地域の自然環境は悪化し、狩猟・採集の対象が減少したと考えられる。人々は、古利根川の下流域に活動領域を移したことによって群馬県側で遺跡数が減少し、埼玉県の大宮台地・武蔵野台地では遺跡数が増加している(西井 2013)。

前橋泥流と古利根川流路の変更によって、信州地域の黒曜石採集活動にも影響があったと考えられている。この時期、大宮台地・武蔵野台地で用いられている黒曜石の原産地が、信州系から伊豆・箱根系と高原山に変わる事と、関連するのかもしれない。

第3次調査の出土した石器群は46点と少ないが、黒曜石製のナイフ形石器と剥片類が含まれている。黒曜石は、肉眼観察では透明度が高く良質であることから、信州系の可能性が高いと考えられる。石器群が浅間板鼻褐色軽石群(As-BP)のどの段階であるのかは、火山灰降下範囲の縁辺部に近いため分解度が低く、細かい検討はできない。しかし、北関東と南関東を結ぶ接点で、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP)に関連する時期の石器群が検出されたことの意義は大きい。

2. 石器群の編年

北坂遺跡の調査成果を基に、周辺の遺跡とを比較し、当該地域の石器群の変遷を概観する。

北坂遺跡第3次調査

第1文化層は、第Ⅴ層中から出土した。石器集中2箇所が検出され、石器46点が出土した。製品はナイフ形石器と掻・削器で、他は剥片類である。石材は主に黒曜石が用いられている。

第2文化層は、第Ⅶ層中からガラス質黒色安山岩製の石刃が単独で出土した。

北坂遺跡第2次調査

40×40mの範囲から、石器集中23箇所が密集して検出された。遺物の出土層位は、第Ⅶ層(暗色帯)中で第3次調査の第2文化層に対比される。石器は399点出土した。製品は頁岩製の疑似二側縁加工のナイフ形石器と黒曜石製の台形様石器、掻・削器である。大型石器は礫器、敲石が出土している。なお、当該期に特徴的な斧形石器は出土しなかった。

頁岩と珪質頁岩の接合資料は、当該期の剥片剥離工程を復元するのに貴重な資料である。

浅見山 I 遺跡

本庄市浅見山 I 遺跡は、北坂遺跡の北西約 4 km の地点にある。遺跡は浅見山丘陵（大久保山）の北縁部に位置し、旧石器は沖積地をのぞむ斜面部でみつまっている。遺物の出土層位は、斜面部のため不確実な部分があるが、ソフトローム層からハードローム層にかけて出土している。ハードローム層上部から浅間板鼻黄褐色軽石（As-YP）が検出されており、北坂遺跡の第Ⅲ層から第Ⅳ a 層に対比できると考えられる。

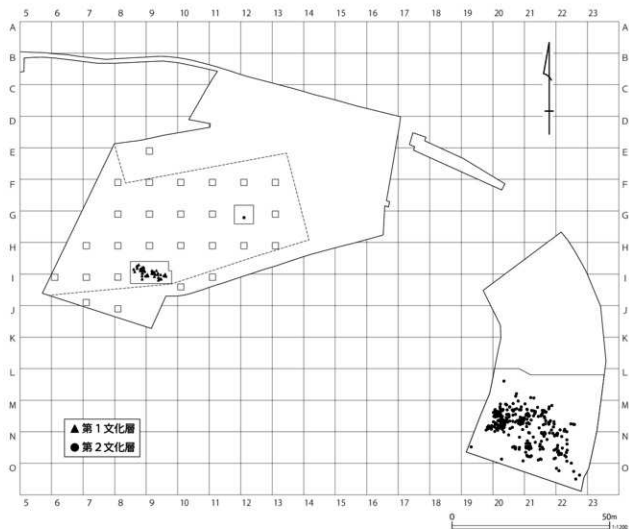
出土石器は、黒曜石製のナイフ形石器 2 点（1・2）と剥片類（3～5）だけの単純な組成である。

ナイフ形石器は、縦長剥片を下位に用いており、調整加工は二側縁に施されている。砂川期の石器群と考えられる。

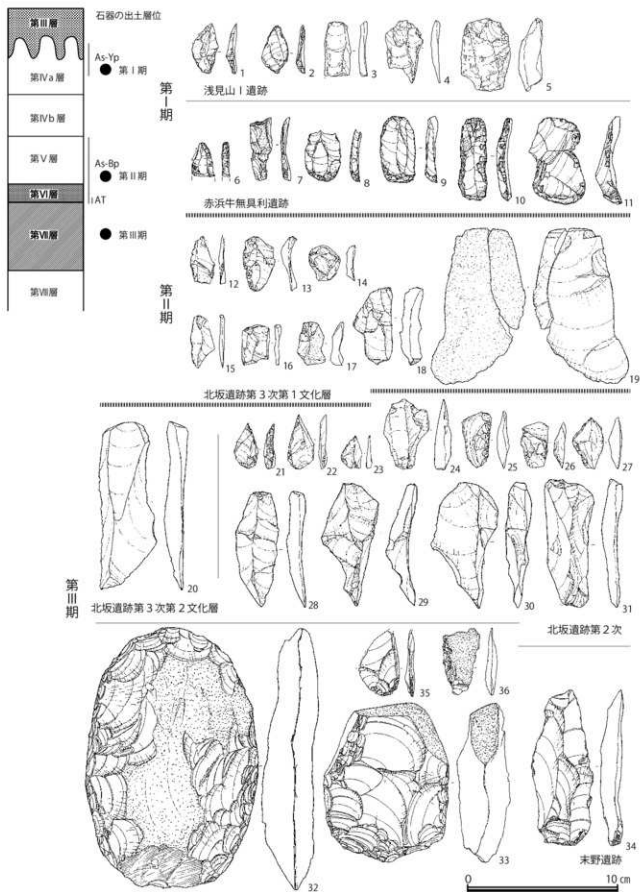
グリッド及び別時期の遺構覆土から、旧石器と思われる石器 62 点が抽出された。製品は有榫尖頭器と荒屋型彫器が含まれている。

赤浜牛無具利遺跡

寄居町赤浜牛無具利遺跡は、北坂遺跡の南西約 8.5 km、荒川右岸の江南台地上に位置する。遺物の出土層位は、ソフトローム層下部からハードローム層上部にかけて出土している。石器集中 1 箇所が検出され、黒曜石製のナイフ形石器と搔器が出土した。ナイフ形石器（6・7）は欠損品と未製品である。搔器（8～11）は定型的で、特に



第 21 図 北坂遺跡第 2・3 次旧石器分布図



第22図 石器編年図

10は砂川期に特徴的な先刃撚器である。

末野遺跡

寄居町末野遺跡は、北坂遺跡の南西約6kmの地点、荒川左岸段丘上に位置する。暗色帯中から石器群が検出されており、北坂遺跡の第Ⅶ層（第2文化層）と対比できる。

石器は48点と少ないが、製品が多い。

斧形石器は、局部磨製石斧2点と打製石斧2点が出土した。

局部磨製石斧は、長さ17.30cm、重さ923.92gのガラス質黒色安山岩製（32）と、長さ17.80cm、重さ649.40gの頁岩製の2点が出土している。今までに発見されている局部磨製石斧の中で、最も大きく重いクラスのものである。

他にナイフ形石器（34・35）・台形様石器（36）と石刃が出土している。石刃は、長さ10cm近いものがあり、北坂遺跡第3次調査第2文化層の石刃（20）の長さ11.10cmと近似する大きさである。

以上、北坂遺跡と周辺の遺跡から検出された旧石器の出土層位及び石器群を概観した。これを、

埼玉県の石器編年と対比すると以下のような。（第22図）

第Ⅰ期 埼玉編年Ⅳ期に相当する。埼玉県砂川遺跡の資料を基準に砂川期（石器文化研究会2000）と呼称される。第Ⅰ期とした浅見山Ⅰ遺跡と赤浜牛無貝利遺跡の出土層位を確認すると、北坂遺跡の第Ⅲ層から第Ⅳa層に対比できる。この層から浅間板鼻黄褐色軽石（As-YP）が検出されている。As-YPの年代と石器群の年代に差があるが、層位区分の解像度の問題と考えられる。

第Ⅱ期 埼玉編年Ⅲ期に相当する。武蔵野台地の層位区分名で第Ⅴ・Ⅳ層下部段階（石器文化研究会1996）に対比できる。

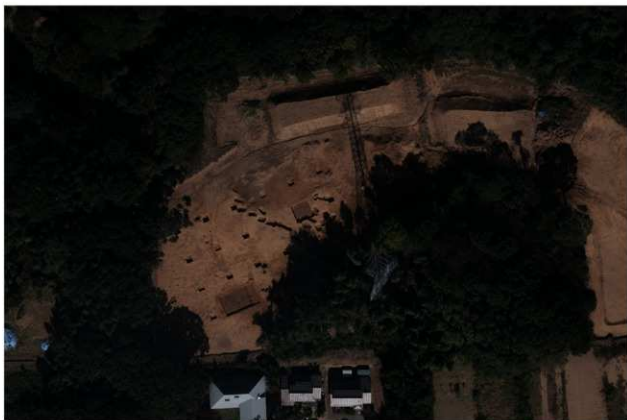
第Ⅲ期 埼玉編年Ⅰ期に相当する。武蔵野台地の層位区分名で第Ⅳ層段階（石器文化研究会1991）に対比できる。

北坂遺跡と周辺の遺跡から出土した旧石器を比較し、石器群の変遷を概観した。この成果は、今後当該地域の旧石器時代を検討するための基礎資料になると考えられる。

参考・引用文献

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999 『城見上／末野Ⅲ／花畑遺跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016 『北坂遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第425集
- 埼玉考古学会編 1997 『埼玉考古別冊第5号—特集号 埼玉の旧石器時代—』埼玉考古学会
- 石器文化研究会編 1991 『石器文化研究3 シンポジウム AT 降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比—』石器文化研究会
- 石器文化研究会編 1996 『石器文化研究5 シンポジウム AT 降灰以降のナイフ形石器文化—関東地方におけるⅤ—Ⅳ下層段階石器群の検討—』石器文化研究会
- 石器文化研究会編 2000 『石器文化研究9 シンポジウム 砂川—その石器群の地域性—予稿集』石器文化研究会
- 西井幸雄 2013 「遺跡の分布からせまる」『平成24（2012）年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー 考えよう！旧石器人のライフスタイル—人とモノの移動から探る旧石器時代の生活—発表要旨』公益財団法人かながわ考古学財団 pp.8 - 12
- 本庄市教育委員会 2009 『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）A1・B2地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 寄居町遺跡調査会 2006 『赤浜牛無貝利遺跡』寄居町遺跡調査会報告第29集

写真図版



1 北坂遺跡空中写真



2 遠景（南から）

図版 2



1 近景（西から）



5 調査区全景（東から）



2 遠景（北西から）



6 調査区全景（北から）



3 遠景（北から）



7 基本土層



4 調査区全景（西から）



8 第Ⅷ層平面状況



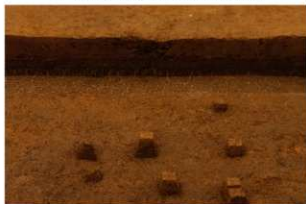
1 G-13 グリッド断面



5 第1文化層遺物出土状況 (西から)



2 G-9 グリッド断面



6 第1文化層遺物出土状況と土層断面



3 H-13 グリッド断面



7 第1号石器集中遺物出土状況 (1)



4 第1文化層調査区 (西から)



8 第1号石器集中遺物出土状況 (2)

図版 4



1 第1号石器集中遺物出土状況(3)



5 第2文化層遺物出土状況(2)



2 第2号石器集中遺物出土状況



6 第5号土坑



3 第2文化層調査区(南東から)



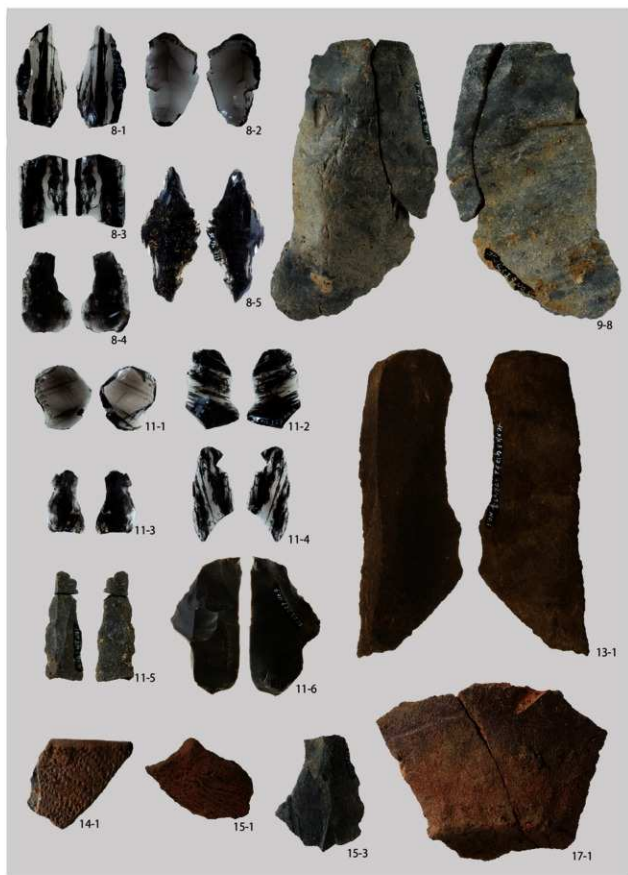
7 第1・2・4・6～9号土坑



4 第2文化層遺物出土状況(1)



8 第3号土坑



1 出土遺物

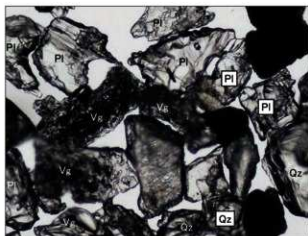
図版 6



1. 重鉱物 (G-12グリッド:5)



2. 重鉱物 (I-9グリッド:13)



3. 火山ガラス (G-12グリッド:2)



4. 火山ガラス (I-9グリッド:8)



5. 砂分の状況 (G-13グリッド:1)



6. 砂分の状況 (G-13グリッド:2)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物, Vg: 火山ガラス,
Qz: 石英, Pl: 斜長石.

1 重鉱物・火山ガラス・砂分の状況

0.5mm 1.0mm

報告書抄録

[illegible]

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第426集

北坂遺跡Ⅲ

(仮称) 寄居PAスマートインターチェンジ発掘調査業務委託に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

平成28年11月16日 印刷

平成28年11月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社 文化新聞社